

シメジに関する分類学的研究

Rokuya IMAZeki: *Tricholoma aggregatum* (SCHAEFFER ex SECRETAN)
COSTANTIN et DUFOUR and *T. conglobatum* (VITTADINI) SACCARDO.

今 關 六 也

シメジには2種がある

今さらシメジの正体は？ などと云うと不審をいだく人が多いであろう。しかしフランスの KONRAD et MAUBLANC の菌譜 (Ⅲ: 247) を見ても、日本のシメジに相当する *Tricholoma aggregatum* の名の下に1頁半にわたる異名をあげ、かつ “*T. aggregatum* は非常に多形性であるために、色々な種がつくられたが、結局種としては一つとしか考えられない” と記してあるように、大層複雑な茸であり、学名の選択についても諸家まちまちで定説がない。和名についてもこれと同様で、各種の異名、地方名があるばかりでなく、或は近似近縁の種との間に混同があり、かなり複雑な様相を呈するのである。

広江氏¹⁾ の応用菌叢学 (654 頁) に “シメジは地方によつてカブシメジ、センボンシメジ、イツボンシメジ、ゾイコクシメジ、ヒヤツボンカンコなどと称せられている。なほ京都においてサカシメジ、島根県仁多地方でコハギ、鳥取地方でセンボンシメジと称せられるものは、別種のものと認めサカシメジなる新和名を付して区別したとあり、p. 657 でサカシメジに対して *Tricholoma Sakashimeji* MATSUURA, n. sp. なる新名 (但し nom. nudum) を作つた。

シメジとサカシメジとの区別は、前者が多数群生はするが、各1個体づつがとり離すことができる式なのに対して、後者では球塊状の共通の株から小形の茸を極めて多数群生するものであり、又前者は個々の茎が徳利形に下半部が膨れるのに対して、後者では細くて上下同大であるなどの点に、主な違いがある。また筆者の観察によるとシメジは10月中旬、サカシメジは10月初旬に発生、即ち1週間乃至10日位発生期に差がある。筆者も広江氏と同様に、一般にシメジと呼ばれる茸には少くとも2種があり、特に広江氏が区別する両種の存在を認めていた。しかし両種に対する和名及び学名については同氏とは異つた見解をいだくものであり、以下これに就て記す。

本草書及び地方名に基く和名の考察

第一に本草書から広江氏のシメジに相当するものを拾うと、

1. 市岡智寛 (23) : 信陽菌譜にシメジとして図説するもの (Fig. 1, a)。同書解説に曰

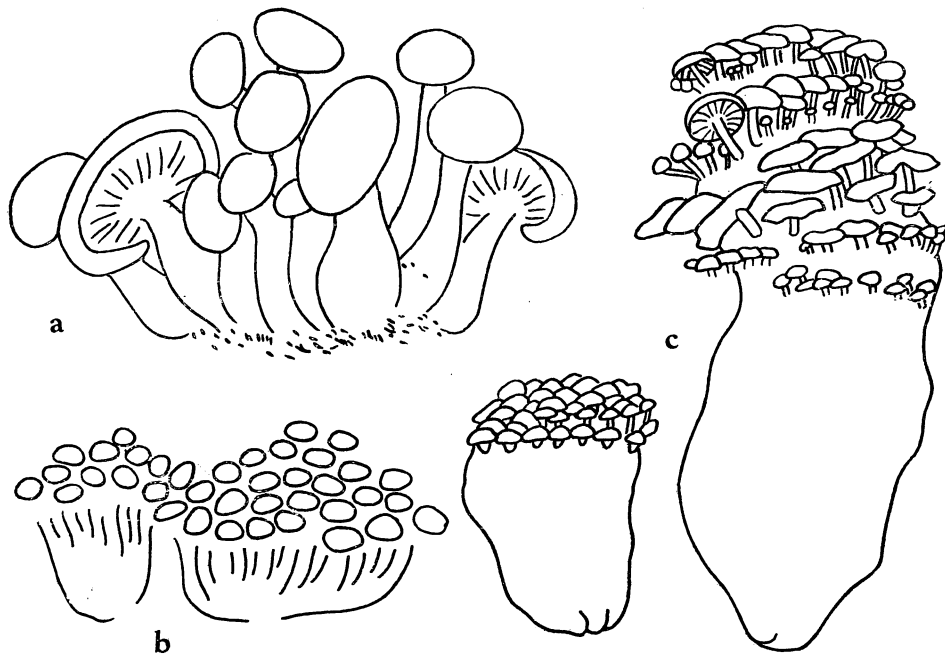


Fig. 1. Sketches of *Tricholoma aggregatum* and *T. conglobatum* in old Japanese publications or manuscripts on mushrooms.

- a *Tricholoma aggregatum* (信陽菌譜: シメヂ, 俗称大黒)
- b *T. conglobatum* (同: イボコギリ, イボシメヂ)
- c *T. conglobatum* (浩然菌譜: シメヂ, 俗称大黒).

く「俗称大黒者、柄肥大而味甘美……」。

2. 坂本浩然 (24) : 浩然菌譜にセンボンシメヂとして図示するもの。解説に曰く「形小く、松菌に似て叢生す、蓋小にして茎肥えたり、甘美口に可也、亦大黒占地と呼び形木塑の大黒神に似たるを以て名くと云へり」。

3. 吉田平九郎 (26) : 雀巢菌譜にシメヂ、シラシメヂ (湿茸、シメヂ、シツジョウ; 玉蕈、ギョクシン) として図示するもの。

次に広江氏のサカシメヂに相当するものとしては、

1. 信陽菌譜にイボコギリ、イボシメヂとして図示するもの (Fig. 1, b)。解説に曰く、「似湿地蕈而形小也、為座数百叢生、味漸減為中品」。

2. 浩然菌譜にセンボンシメヂとあるもので、(Fig. 1, c)「櫟樹の下に生ず、初生大さ拳の如く、後数千頭のシメヂ簇々として生ず、その色灰白、土俗呼んで千本シメヂと云、味い最も美なり」と図解されているもの。

3. 雀巢菌譜にイボククリとし、解説に「三河国加茂郡和合村土人、千本シメヂと云う」としたもの。

上記を見ても、シメヂを 2 種に区分することは今日に始まつたことではないことがわかる。

近年の文献によつても、貴田武捷氏 (17) は兵庫県下ではシメジ又はダイコクシメジと呼ばれるものと、シヤカシメジ又は子持シメジといわれるものとが区別されているし、又尾形大治氏 (21) によれば岩手県でもシメジとセンボンシメジ (又の名アンズキモタセ、センゲンモダツ) の2種を区別している。筆者も亦、福島県相馬郡及び田村郡 (いずれも相馬シメジの名があるくらいのシメジの名産地である) でも両者は発生の時期、形態、生態、品質などの点から明らかに区別していることを見聞きしている。

以上を総合して、シメジに所謂大黒系と千本系の2種があることは、古来また各地において認められており、分類学的にもこれを区別するのが妥当な見方であると考えるのである。

和名の整理

以上の結論に従つて、古来各地で用いられるシメジの和名を大黒系と千本系にあてはめて整理すると、

a) 大黒系：シメジ、カブシメジ、ダイコクシメジ、センボンシメジ、イツボンシメジなど。

b) 千本系：シメジ、センボンシメジ、コモチシメジ、シヤカシメジ、サカシメジ、イボコゴリ、イボククリなど。

となる。これらの中から両シメジの正名を選ぶ前に、シメジとゆう名を、例えばサクラ、マツの様にシメジ類の総合名とするか、或は特定の1種、即ち狭義のホンシメジとも云はれるダイコクシメジの正名に限定するがよいかを考えたい。筆者はこれについてシメジを総合種名とする広義の解釈をとることが、和名の混乱を避ける為に良いと思う。なぜならばシメジを上記の2種に区別する地方は少ないが、シメジとゆう名は必ずしも厳密な意味では大黒系だけを示すものとしては用いられてはいない。菌学書を見ても川村博士はこれら両菌を区別せず、シメジ又の名センボンシメジとゆう様に記しているのである。かりに大黒系に対してシメジを、千本系に対してセンボンシメジをあてるとした場合、これら2種の菌はともに多かれ少かれ簇生する性質があり、他のシメジ属の菌と区別するのにはむしろ千本シメジの名の方が都合がよいくらいである。例えば千本シメジに対して1本シメジ (菌学的にはこの名は *Entoloma* をさすのであるが、一般にはシメジの孤生するものにも通用させている) の名があるように、千本シメジは大黒系に対する千本系の呼び名として通つている場合があると同時に、孤生するシメジや *Entoloma* に対して、簇生するシメジ類の一種の総合名として用いられる場合も少ないのである。

以上の様な紛らはしさを思いめぐらすと、シヤカシメジとかダイコクシメジの名は、何れもただ一つの種を指していて紛らはしさもなく、また適当な名称でもある。これらのことから狭義のシメジの本名としてダイコクシメジの名を用い、千本系に対してシヤカシメジのような

名を用いるのが、若し白紙の上に立つて命名する場合にはよいと思うが、この様な菌学者流の潔癖性を一般に押しつけても、たやすくは受け入れられないむずかしさを考えるならば、筆者は次の様な結論を与えるのがよいと考えるのである。即ち、

大黒系の正名：ホンシメジ（新）及びダイコクシメジ（異名 カブシメジ）

千本系の正名：シャカシメジ及びセンボンシメジ（異名 サカシメジ、イボコゴリ、イボククリ、子持シメジなど）

正名を 2 つずつ設けたことはどうかと思うが、これほど人口に親まれている茸に対しては余りに神経質な提案をしても一般には受け入れられないと思うからである。

ちなみにダイコクシメジの名は、茎が徳利状にふくらみ、浩然菌譜に書かれた様に、その状大黒神を思わせるところから、シャカシメジは球塊状に群小のきのこがかたまつて生じ、若い茸の様子が恰も仏陀の頭の如く、いわゆる釈迦頭に似た観を呈することから起つたものと解せられる。サカシメジは云うまでもなくその転訛であろうが、シャカシメジの方が適切である。また後者の異名イボククリ又はイボコゴリは幼菌の釈迦頭状を疣の凝り塊つたものとし、疣のこごつたものとゆう意味であろう。子持シメジの名も菌の形態からつくりだされた良い名である。これらの名は何れも両菌の特徴を良く表現し、みな適切な名と考えるが、結論としては上記の如く整理したい。

学 名 の 検 討

いま KONRAD et MAUBLANC の *Icones Selectae Fungorum* から上記ホンシメジ（ダイコクシメジ）とシャカシメジ（センボンシメジ）にあてはまる学名を求めて見ると、前者には *Tricholoma aggregatum* (SCHAEFFER ex SECRETAN) COSTANTIN et DUFOUR が、後者には *T. aggregatum* subsp. *cinerascens* (BULL. ex COOKE) KONRAD があげられる。これらの図を日本の両菌と比較すると、*T. aggregatum* は傘が余りにも黒きにすぎているし、また subsp. *cinerascens* の図は前種の単なる淡色系を示す程度で、その形状は日本のセンボンシメジの特徴をあらわしてはいない。然し両者の記載とそれに付記されている詳しい記事によれば、これらは明らかにそれぞれ日本の 2 種のシメジの特徴を云つて居り、これらがホンシメジ及びセンボンシメジに一致することを示している。

これに対して日本では川村清一博士がかつて *Tricholoma Shimeji* KAWAM. なる新名をつけたことがあつたが、その後は例外なく *Tricholoma conglobatum* が用いられ、今日までその名が通用している。この *T. conglobatum* の名は KONRAD et MAUBLANC によれば *T. aggregatum* subsp. *cinerascens* の異名となつている。

ホンシメジの学名

Tricholoma aggregatum の名は *Agaricus aggregatus* SCHAEFFER (1770) から出ており、これを SECRETAN (1833) が 1821 以後はじめて採用したのである。これに対して KONRAD et MAUBLANC が *T. aggregatum* の異名として列記する中には、SECRETAN よりも古い *Agaricus molybdinus* FRIES (1821), *A. amplus* PERS. ex ER. (1821), *A. hortensis* PERS. ex FR. (1821), *A. decastes* FR. (1821) などがある。これらはいずれも規約上の先名権をもつものであるが、これらをさしおいて KONRAD 氏等が *aggregatus* を採用したのは、この名が最もひろく用いられているのである為か、或は FRIES 以前の先名権をも認めたためであるかと考えられる。筆者は FRIES 以前の先名権を問題にする意志はないが、異名と考えられる学名が多数あり、しかも未だにその取捨に定説がない場合には正確な図と記載があり、しかも広く用いられている学名をとりあげるのが、学名の混乱をさけるのに最善の方法であると信ずる。この意味で “*aggregatus*” を採用するのが一番穩当であると思うが、なほ念の為、多くの異名の中から有力な候補者をあげると、*Agaricus amplus* (*Clitocybe* 又は *Tricholoma*) と *Agaricus decastes* (*Clitocybe*) とがある。前名に対しては、FRIES (6), COOKE (3), BRESADOLA (2) の図があるが FRIES の図は概形的にはシメジによく似るが、茎に明らかな毛がある点 (Stipite apice subvillose) が難点である。COOKE の図は 1 本立のものであり、BRESADOLA の図も 1 本立でしかも茎が細く同大で、シメジに似ない。*decastes* については FRIES (6), BARLA (1) があるが、FRIES の図は多数簇生する形はよいが、傘の色が褐色をおび、茎が上下同大である点がまずく、BARLA の図はホンシメジ、センボンシメジの何れにも似ない。図で最も良いと思はれるのは傘の色は黒過ぎるが KONRAD et MAUBLANC の *T. aggregatum* の図と、BARLA が *T. tumulosum* (KALCHBR.) の名で載せたものである。COOKE の *tumulosum* の図も大体良いが、何れにしても *tumulosum* の名は 1873 年の命名で、他にくらべて余りにも新しく、これをもつてホンシメジを代表させるわけには行かない。

筆者はこの他に *Clitocybe cinerascens* BRES., Icon. Myc., III : 149 (1928) [= *C. conglobata* BRES., Fung. Trid., 1 : 27, tab. 32 (1883), non Icon. Myc., IV : 151 (1928)] を *T. aggregatum* の異名と考える。*C. cinerascens* BRES. は氏の記載文の中 “stipes..... aequalis vel basi attenuatus” の点を除いて、記載も図もホンシメジに極めて類似する。*cinerascens* と *conglobata* との差異は、BRESADOLA の言葉を借りると “Species haec (*C. conglobata*) a *C. cinerascens* BULL., cui valde affinis, colore pallidiori et praesertim tubere subterraneis, carnoso, compacto bene distinguitur.” とあり、ホンシメジとシヤカシメジとの相違点に符合している。一方 LANGE は Fl. Agar. Dann. p. 88, *C. conglobata* の説明の中で “My specimens answer very well to the descriptions given by FRIES and NÜSSCH and also to that of BRESADOLA in Fung. Trid., but in Iconographia he uses

the name *Ag. cinerascens* BULL. for the same plant, transferring the name *C. conglobata* to another almost white species.”と述べている。若し LANGE の *C. conglobata* がわがシヤカシメジであるならば、BRESADOLA の *cinerascens* をホンシメジ即ち *aggregatus* の異名とすることは不合理であるが、筆者は前記の理由、即ち BRESADOLA の解釈によつてこれを *aggregatus* の異名と考える。

また *Agaricus Pes Caprae* COOKE, *Tricholoma Pes Caprae* GILLET は KONRAD 氏らによると *T. agglutinatum* subsp. *cinerascens* シヤカシメジの異名になつてゐるが、COOKE, GILLET の図及び記載を見ると、ホンシメジ *T. aggregatum* に遙かに近く、むしろ同一種と判断せざるを得ない。

シヤカシメジの学名

これに相当するものとしては KONRAD et MAUBLANC は前記の様に *T. aggregatum* subsp. *cinerascens* を用いている。我国でこれまでホンシメジにあてていた *T. conglobatum* は KONRAD 氏等によれば subsp. *cinerascens* の syn. である。たゞし両氏らが異名としている *conglobatum* は BRESADOLA, SACCARDO, LANGE, BARLA, RICKEN などの解釈による *Clitocybe conglobata* 又は *Tricholoma conglobatum* であつて、原著者 VITTADINI の *Agaricus conglobatus* は “=espece deuteuse” として除外しているのである。これに対して BRESADOLA 以下の諸氏は VITTADINI の原品は勿論、我々のシヤカシメジと同じものと見てゐるのである。VITTADINI の原植物に対するかかる解釈の相違は恐らく解決されないであらう。一方 KONRAD 氏らの *cinerascens* は *Agaricus cineracens* BULLIARD (1778) から出ているのであり、KONRAD 氏らはこれをシヤカシメジと同定しているが、LANGE はこれを *Clitocybe infumata* BRES. f. *nana* の異名とし、“The name *cinerascens* BULL. is older, but is used in so many different ways that I prefer to adopt an undisputed, newer one....” と付記している。LANGE も亦、学名の採扱には priority 絶対尊重には偏しない態度をとつてゐることがわかるし、又 *cinerascens* についても BULLIARD の原菌に対する解釈に定説がないことを示している。

この様にシヤカシメジの学名候補としては *cinerascens*, *conglobatus* が第1にあげられ、さらに *Agaricus PesCaprae* COOKE などがある。第1候補 *Tricholoma cinerascens* BULL. ex BARLA [non FRIES] は BARLA, BOUDIER, MAIRE, KONRAD et MAUBLANC が採用しているが、BARLA の図は貧弱なもので到底シヤカシメジとは見えない。又 COOKE の *Agaricus cinerascens* の図も形の上ではむしろホンシメジに近いものである。第2候補 *conglobatus* は *Clitocybe conglobata* BRES. として BRESADOLA, SACCARDO, LANGE, COKER et BEARDSLEE などが、*Tricholoma conglobatum* として BARLA, RICKEN, VELENOVSKY, ULBRICH などが

採用している。この内 BARLA, LANGE, BRESADOLA (2) の図は比較的良くシヤカシメジの特徴をあらわし, COKER (4) の写真は最もよく日本のシヤカシメジに一致している。COKER と BEARDSLEE は“標本を写真とともに BRESADOLA に送った。これに対して BRESADOLA は *C. conglobata* VITT., Fungi Mangericci tab. 34 (Fungi Trid., tab. 32 の *conglobata* = *cinerascens* BULL. ではない) であるとの同定を与えられた”と記している。即ち BRESADOLA によれば, N. Carolina から送られた茸, 即ち日本のシヤカシメジは *cinerascens* ではなくて *conglobata* である。

conglobata の図は, LANGE (10), BARLA (1), BRESADOLA (2) など何れもある程度, シヤカシメジの特徴である球根状体を描いているが, 典型的なものではない。またいづれも傘はやや大きく, 肉厚にすぎてもいる。

BARLA (1) には *C. coalescens* VIV. と云う種が図説されている。この図はシヤカシメジに極めて類似する。しかも BRESADOLA はこれを彼の *C. conglobata* の異名にしている。たゞ BARLA は *C. coalescens* を毒菌としていることが疑問である。

以上のことから総合して, 日本のシヤカシメジは *C. conglobata* とするのが妥当であると考え。たゞし BRESADOLA が *conglobata* として Icon. Myc. に図説するものは, シヤカシメジとしては最良の図ではなく, 又 BARLA, LANGE の図も同様であるが, BRESADOLA が *C. conglobata* とした N. Carolina の菌と, BRESADOLA が *conglobata* とみなした BARLA の *C. coalescens* などが日本のシヤカシメジに極めて符合すること, 及び BRESADOLA の意見に同調して, 日本のシヤカシメジに *T. conglobata* の名をあてることが大体穏当と考える。そしてこれが *Agaricus cinerascens* とゆう規約上の先名権を持つものと同種であるとしても, LANGE がゆう様に *cinerascens* の解釈はまちまちで, 採用しない方がよいとの態度と処置に賛成したい。

Ag. Pes Caprae については前記の理由でシヤカシメジではなく, むしろホンシメジであると考え。

“Simezi” fungus is one of the two best wild mushrooms which are most highly prized by Japanese people. The other one is *Armillaria Matsutake*. They say that the taste is best in “Simezi” and the flavour is best in *A. Matsutake*. Notwithstanding its high reputation and close acquaintance with Japanese people, there are some confusions concerning the taxonomy of “Simezi” fungus, because the plant so called under this name is a complex one and embraces at least two different species. In spite of this confusion, we are accustomed to call it under the name of *Tricholoma conglobatum*. In this paper

the writer intended to arrange it taxonomically.

The two representatives among the plants called Simezi or *Tricholoma conglobatum* in Japan are shown by PLATE I and Text Fig. 1. The writer referred in this paper the former to *T. aggregatum* and the latter to *T. conglobatum*. The writer's arrangement is given as follows.

Tricholoma aggregatum (SCHAEFFER ex SECRETAN) COSTANTIN et DUFOUR, Nouv. Fl. Champ., 16 (1891)—RICKEN, Blätterp., 360, t. 97, f. 1 (1914)—KONRAD et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung., 3: 247 (1934) *Agaricus aggregatus* SCHAEFFER (1770)—SECRETAN, Mycogr. Suisse, 2: 141 (1833)—FRIES, Epicr., 65 (1836)—COOKE, Illust. Brit. Fung., 145 *Clitocybe aggregata* GILLET, Champ. Fr., 161 (1878)—SACCARDO, Syll. Fung., 5: 160 (1887)—REA, Brit. Basid., 278 (1922)—LANGE, Agar. Denm., VIII, 58 (1930)

Agaricus amplus PERSOON ex FRIES, Syst. Myc., 1: 95 (1821); Icon. Sel. Hymen., 1: 50, t. 53—COOKE, Illustr., 1129 *Clitocybe ampla* GILLET, l. c., 164 (1878)—SACCARDO, l. c., 5: 159 (1887)—BRESADOLA, Icon. Myc., 3: 148 (1928) *Tricholoma amplum* REA, Brit. Basid., 227 (1922)

Clitocybe cinerascens BRESADOLA, Icon. Myc., 3: 149 (1928) *Clitocybe conglobata* BRESADOLA, Fung. Trid., I, 27, t. 32 (1883) [non VITTADINI]

Tricholoma conglobatum KAWAMURA et auct. japon., pr. p.—KAWAMURA, Nippon Kinrui Dusetu, 148 (1929)—IMAI, Agar. Hokkaido, I, 72 (1938), pr. p.—KOBAYASHI, ASAHINA Inka-Dukan, pl. 267, (1939), pr. p., f. 2—3.

Agaricus decastes FRIES, Syst. Myc., 1: 49 (1821); Icon. Sel. Hym., 1: 49, t. 52 *Clitocybe decastes* QUELET, Champ. Jura Vosg., I, 87 (1872)—GILLET, l. c., 162 (1878)—SACCARDO, l. c., 5: 160 (1887)—BARLA, Champ. Alpes-Mar., 69, t. 53, f. 9—12 (1890)—REA, l. c., 277 (1922)

Agaricus molybdinus FRIES, Syst. Myc., 1: 49 (1821) *Clitocybe molybdina* GILLET, l. c., 163 (1878)

Agaricus hortensis PERSOON ex FRIES, Syst. Myc., 1: 195 (1821)—*Clitocybe hortensis* GILLET, l. c., 161 (1878)

Agaricus humosus FRIES, Epicr., 66 (1836) *Clitocybe humosa* QUELET, l. c., I, 87 (1872)

Agaricus Pes Caprae COOKE, Handb. Brit. Fung., Ed. 2, 365 (1813); Illustr., 1124 *Tricholoma Pes Caprae* QUELET, Champ. Jura Vosg., II, 340 (1873)—GILLET, l. c., 119, t. 84 (1878)—REA, l. c., 233 (1922)

Agaricus tumulosus KALCHBRENNER, Icon. Hym. Hung., 13, t. 5 (1873)—FRIES, Hym. Eur., 91 (1874)—COOKE, Illustr., 148 *Clitocybe tumulosa* SACCARDO, l. c., 5: 162 (1887)—REA, l. c., 279 (1922)—COKER et BEARDSLEE, Journ. Ell. Mitch. Sci. Soc., 38: 109, pl. 16—17 (1922) *Tricholoma tumulosum* BARLA, Champ. Alpes-Mar., 56, t. 43, f. 1—3 (1890)

Tricholoma Shimeji KAWAMURA, Ill. Jap. Fung., Pl. 13, f. 8—10 (1915)

Nom. Jap.: Hon-simezi, Daikoku-simezi, Kabu-simezi, etc.

Distribution: Europe, N. America, Siberia, Japan.

This wide distributed *Tricholoma* has been called variously by many authors. Among many names, KONRAD and MAUBLANC selected the name *Agaricus aggregatus* SCHAEFFER ex SECRETAN as a representative one. The writer followed KONRAD and MAUBLANC's treatment. Among the synonyms listed above, *Ag. Pes Caprae* COOKE, *Tricholoma Pes Caprae* QUEL. (GILLET: Champ. Fr., 119, t. 84), *Clitocybe cinerascens* BRES. (Icon. Myc., 3: 149), and *Clitocybe conglobata* BRES. (Fungi Trid.), were placed under *T. aggregatum* subsp. *cinerascens* KONR. (*T. conglobatum* of the writer) as synonymous by KONRAD and MAUBLANC. The descriptions and figures given by COOKE, GILLET, and BRESADOLA, however, agree with Japanese *T. aggregatum*, except that they are written as the stems being equal, while those of Japanese *T. aggregatum* are swollen downward.

The fruitbodies of Japanese *T. aggregatum* are densely caespitose and compactly connected with each other at the base, not growing up from the tuberous mass as in the next species. They grow abundantly in a line in mixed woods. Stems are decisively thickened downward and ventricose. The plant grows a little later than the next species, generally to say, *T. aggregatum* occurs at the middle of October, whereas the next species grows in the beginning of the month.

Tricholoma conglobatum (VITTADINI) SACCARDO, Syll. Fung., 5: 126 (1887) —BARLA, Champ. Alp. Mar., 56, 42, f. 8—15 (1890)—RICKEN, Blätterp., 360 (1914) *Agaricus conglobatus* VITTADINI, Fung. Mang., 349 (1835)—FRIES, Epicr., 46 (1836) *Clitocybe conglobata* BRESADOLA, Fungi Manger., 59, t. 35 (1899); Icon. Myc., 4: 151 (1928)—LANGE, Agar. Denm., VIII: 59 (1930); Fl. Dann. Agar., I: 88, Pl. 39, f. D. (1935)

Tricholoma aggregatum (SCHAEFFER ex SECRETAN) COSTANTIN et DUFOUR subsp. *cineracens* BULLIARD ex KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr., 47: 141 (1931)—KONRAD et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung., 3: 248 (1934).

Agaricus cinerascens BULLIARD ex COOKE, Handb. Brit. Fung., 41 (1883); Illustr., 116 [non FRIES]

Tricholoma Sakashimeji MATURA, Ooyo-Kinzingaku, Ed. I, 657, f. 529 (1934)

Tricholoma conglobatum auct. plur. in Jap. litt., pro p.

Nom. jap.: Syaka-simezi Senbon-simezi, Sakasimezi, Ibokogori, Ibokukuri, Komoti-simezi, etc..

Distribution: Europe, N. America, Japan.

Japanese fungus exactly agrees with the plant of North Carolina, U. S. A., which was collected by COKER and BEARDSLEE and figured in their "*Laccarias* and *Clitocybes* of N. Carolina (Pl. 18)". This N. Carolina specimen was sent to BRESADOLA and referred to *Clitocybe conglobata* VITT. by him, with the statement, "*C. conglobata*, Fungi Mang., tab. 34, not Fungi Trid., tab. 32 which is *C. cinerascens* BULL." The writer followed this Bresadola's identification as COKER and BEARDSLEE did, although the most of illustrations of *C. conglobata*

(or *Tricholoma conglobatum*) in the European literatures do not seem to accord with the Japanese fungus. Those illustrated European specimens take an intermediate form of Japanese *T. conglobatum* and *T. aggregatum*. The descriptions of *C. conglobata* given by them, however, evidently represent the characteristic of Japanese *T. conglobatum*, as the stems springing in large numbers from a solid tuberous mass.

Literature cited

1. BARLA, J. B. : Les champignons des Alpes Maritimes. 1888—92.
2. RESADOLA, J. : Iconographia Mycologia, vols. II and III. 1928.
3. COOKE, M. C. : Illustrations of British Fungi, I—VIII. 1881—91.
4. COCKER, W. C. and H. C. BEARDSLEE. : The Laccarias and Clitocybes of North Carolina. Journ. of Elisha Mitch. Sci. Soc., 38: 98—126, 1922.
5. FRIES, E. M. : Systema Mycologicum, I. 1821.
6. — : Icones Selectae Hymenomycetum nondum delineatum. I—II. 1864—84.
7. GILLET, C. C. : Les champignons qui croissent en France, 1878.
8. IMAI, S. : Agaricaceae of Hokkaido, I—II. 1938.
9. KONRAD et MAUBLANC. : Icones Selectae Fungorum, vol. III. 1934.
10. LANGE, J. E. : Flora Agaricina Dannica. I. 1935.
11. REA, C. : British Basidiomycetes. 1922.
12. RICKEN D. : Die Blätterpilze.
13. ULBRICH, : Die Höherenpilze. 1928.
14. 伊藤一雄 (K. ITO) : シメジに関する研究 第一報 Studies on “Simezi” [*Tricholoma conglobatum* (VITT.) SACC.], one of the most important edible fungi in Japan. 日本林学会誌 22: 320—336 (1940).
15. 川村清一 (S. KAWAMURA) : 日本菌類図譜 Illustrations of Japanese Fungi (1915).
16. — : 日本菌類図説 (1929).
17. 貴田武捷 : 兵庫県下における食用菌類について (第1報) Appl. Mushr. Sci., 1: 51—4 (1935).
18. 小林義雄 (Y. KOBAYASHI) : 日本隠花植物図鑑 Asahina's Illust. Jap. Crypt. (1939).
19. 松浦 (広江) 勇 : 応用菌類学 (1934).
20. — : 原色茸類辞典 (1932).
21. 尾形大治 : 岩手県に産する食用菌類 Appl. Mushr. Sci., 3: 17—25 (1937).
22. 今関六他 : 原色きのこ (1942).

本 草 書

23. 市岡知寛 : 信陽菌譜 (1799).
24. 坂本浩然 : 浩然菌譜 (1834).
25. 岩崎濯園 : 本草図譜 (1827).
26. 吉田平九郎 : 雀巢菌譜 (1858).

Explanation of PLATE I

1. ホンシメジ一名ダイコクシメジ *Tricholoma aggregatum* (SCHAEFF. ex SECR.) COST. et DUF., coll. at Isigami-mura, Soma-gun, Pref. Hukusima, on Oct. 17, 1949, by IMAZEKI-R.
2. シヤカシメジ一名センボンシメジ *T. conglobatum* (VITT.) SACC., coll. at Miyakozu-mura, Tamura-gun, Pref. Hukusima, on July 20, 1951, by TOKI-S.
3. シヤカシメジ一名センボンシメジ *T. conglobatum* (VITT.) SACC., coll. at Onuma-mura, Kitasaku-gun, Pref. Nagano, on Oct., 1950, by IMAZEKI-R.

